



セロリが好きで夏がダメ

「相手の立場になって考えなさい」は、今も昔もよくなされる指導です。しかし、これは実はとても難しい指導です。（これを即座にイメージできる方は、教えることの難しさを相応に体験してきた方かもしれません）なぜなら、「相手の立場になって考えること」はとても難しい営みだからです。

月並みな言葉ですが、人はみな違って、それぞれ生まれながらに固有の感覚や捉え方をもっています。

育ってきた環境が違うのですから、好き嫌いは否めません。

夏がダメだったり、セロリが好きだったりします。

そうした感覚や捉え方の違いを乗り越えて、相手の立場に思いを馳せるためには、高度な想像力や共感力が必要となります。

例えば、今年1年生でよく起きたのが「身体接触によるトラブル」でした。

- 友達を肩をポンと叩く。
- 後ろから友達を押す。
- 服を引っ張る。

「している側」からすれば、それを「他愛のないコミュニケーション」と捉えているケースを想像してみてください。

悪意に満ちている様子は微塵もありません。

ニコニコとスキンシップを楽しんでいる様子すらあります。

そうやって楽しく友だちと交わった経験もきっとあったのでしょう。

ただし、その子にとっては「楽しいこと」で「仲良くなれるチャンスを作ること」であっても、その感覚は万人共通のものではありません。

ですから、実際に肩を叩かれたり後ろから押された子の多くは、楽しむどころか全くの別反応を示すことになります。

いったい何が始まったのかと呆然としたり、攻撃されたと思って叩き返したり押し返したり、そこから大人では考えられないような大きなケンカに発展することも起きました。

その状態を受けて、学校では指導の算段を立てます。

まずは、全体にルールの確認をしました。

それは、「人の物や体にむやみに触れてはいけない」というルールです。

自分の物ではない、人の体や人の物。

それは、とても大切なもので傷つけてはいけないからこそ、何の断りもなく触ってしまうのはタブーであることを伝えました。

そして禁止することだけを伝えるのではなく、人に触れても大丈夫な時の例も合わせて伝えました。

例えば、ハイタッチをするとき。

他にも、握手をするとき。

それ以外には、鬼ごっこでタッチする時など。

お互いの了解がそこにある時は触っても大丈夫。

でも、それ以外は基本的に触ってはダメなんだよということを教えました。

このように、全てを禁止するのではなく、「ここまでならしても大丈夫だよ」というラインのことを「セーフライン」といいます。

制限や禁止ばかりを伝える指導は、うまくいかないことが多いです。

それは、「あれもしちゃだめ」「これもしちゃだめ」ということで、行動自体を減らすことにつながったり、創造力や想像力を阻害してしまうからです。

セーフラインと合わせて伝えると良いのが「代替行動」なんですが、話が長くなってしまうのでまた今度お伝えします。

要は、行動を起こす際のルールを伝え、ここまでなら大丈夫というラインを合わせて示すことが大切だということです。

ただし、ルールを教えればそれで解決するかというとそうではありません。

ここが分かっていないと、いざ同じ場面で失敗した時に「この前それをしちゃだめっていったでしょ！」という指導につながってしまいます。

ルールが仮にわかっているとしても、衝動的に体が動くことがあります。

一度の指導の後でも、あっという間に忘れてしまうこともあります。

そもそも、そのルールが適用される場面かどうか判定しにくいことも多々あるでしょう。

ですから、ルールを教えた後は、それが守れた時に「褒める」「認める」「称える」などの関わりを通して、望ましい行動を強化していく必要があります。

多くの先生は、できていないところに目を向けがちです。

そして、できていないことが発生した時に「指導」「叱責」「注意」などの形で戒めることが多いのですが、これはあまり効果を発揮しません。

正確に言うと、その場その場では効果があったとしてもしばらくたてば元通りになってしまうことが多く、根本解決に至りにくいのです。

それくらい、「叱る」という関わりは投下する労力の割に効果が薄いです。薄いどころか、往々にして相手との関係に亀裂を生じさせます。

叱る関わり自体を否定するつもりはありませんが、この関わりは用法用量を守って扱えない方にはリスクが高い方法だということです。

以前に「叱る」の副作用について書いたことがあります。引用します。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝引用ここから＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

■「叱る」の副作用

大前提として、私は叱る関わりを否定するつもりはありません。

「ならぬものはならぬ」と指導することができなければ、学校や教室は無法地帯になってしまいます。

最終的に、学校や教室の秩序を守るのは教師の役目です。

しかし、この「叱る」というかかわりには副作用が多いのもまた事実です。

薬は、用法・用量を守って正しく使うことが大切です。

その副作用や過剰に使った時の怖さを知らなければ、「叱る」かかわりはしてはいけないとも思っています。

「叱る」という行為と正しく向き合うために、副作用を列挙します。

- | |
|------------------------------------|
| 「弁別の法則」：叱る人がいる前ではやらないが、いない時はやる |
| 「派生の法則」：叱る人自身やその人に関連するものも嫌いになる |
| 「反発の法則」：叱る人への反抗心が芽生え、攻撃性が強くなる |
| 「モデリング」：自分がされたのと同じく、叱責で他者を支配する様になる |
| 「馴化」(じゅんか)：叱られる刺激に徐々に慣れてくる |

どれも大変悲しい副作用ですが、特に「馴化」は恐ろしいです。

叱るというかかわりは、相手の行動を手っ取り早く変える事ができる反面、徐々に慣れて効力を失う麻薬の様なものです。

より強い刺激でないと効かなくなる為、エスカレートしていくパターンが

まま起きるということです。

叱って手っ取り早く行動を変える→同じ叱り方では効果が出なくなる→もっと強い叱り方をするようになる

こうした悲しいループは、全国の沢山の教室で今も起きています。

反発心を芽生えさせ、攻撃性を増し、同じく叱責で他者を支配するようになった子どもたちは、反抗挑戦性障害などの「二次障害」とも呼ばれる深刻なケースに陥ってしまうことも少なくありません。

でもこれは、「叱る」というかかわりの怖さを知らず、効果の手っ取り早さに魅せられて、その行為に依存してしまった大人の責任です。

「知らなかった」で済まされることはありません。

だからこそ、教え導く者にとっては「正しい理解」が必要です。

用法・用量を正しく理解し、適切に扱える人でないと託せないほどの怖さをもったかかわりが「叱る」という行いだということなのです。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝引用ここまで＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

繰り返しますが、ルールやラインを教えただけで、子どもたち全員ができるようになることはまずありません。

それで事態が解決するならば、教育とは実に簡単で単純な営みです。

大人だってルールを完璧に守れるわけではないのですから、子どもたちならなおさら多くの失敗します。

その時に、手っ取り早さに魅せられて「叱る」という関わりを多用してしまうことは、やっぱり恐ろしいのです。

では、どうすればよいのか。

ルールを破ってしまったり、セーフラインに収めることができなかつたときは、もう一度立ち戻って「確認」をする必要があります。

どんなルールやラインがそこに存在したか、ということなのです。

その上で、次は守れるように励まします。

もちろん、ルール自体を忘れてしまうこともあるので、全体でルールの確認を行う場面も2度3度と複数の場を設けるようにもしました。

その上で、守れた時に、力強く褒め称えるのです。

この関わりを続けていくと、根本的な解決に至りやすいです。

それは、「他者に無理やりそのようにさせられた」ではなく「自分の意志や気づきによって生まれた行動」だからです。

もう一つ、以前に書いた文章から紹介します。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝引用ここから＝＝＝＝＝＝＝＝＝

以前担任したクラスに、イラっとしたことがあるとすぐに手が出てしまう子がいました。

いわゆる他害行動が習慣化（常習化）してしまっている子でした。

私が担任する前の年には、その他害行動が発端となって毎日のように喧嘩が起きているような状態でした。

私は、まずできるだけ丁寧に教えました。

学校とは、何のために来るところなのか。

その目的をかなえるために、日々どんな行動を積みばよいのか。

他人へ暴力を振るうことが、この社会でどんな罰を受けるのか。

暴力を振るう度、貴方にとってどんなマイナスが起きているのか。

イラっとした時、暴力で解決する以外にどんな選択肢があるのか。

もちろん一度では分かりませんから、何度か言葉を変え場所を変え、その子が受け取りやすい形を探りながら繰り返し伝えました。

そして、それでも暴力を振るってしまった場合は、「確認」をしました。

学校とは、何のために来るところなのか。

その目的をかなえるために、日々どんな行動を積みばよいのか。

他人へ暴力を振るうことが、この社会でどんな罰を受けるのか。

暴力を振るう度、貴方にとってどんなマイナスが起きているのか。

イラっとした時、暴力で解決する以外にどんな選択肢があるのか。

最初は確認するたびに言葉を濁しました。覚えてもいないし、理解もしていないから、言葉が出てこないのです。

でも、何度か確認を繰り返すうちに、彼はその言葉を諳んじるようになりました。

そして、暴力を振るう回数は目に見えて減っていきました。

私は、毎回確認をただけでなく、次の言葉を彼に伝えました。

君がもし、またイラっとして友だちに暴力を振るいたくなったら時。

その振り上げた拳を、自分の心の力で止められたとしたら、そのまま先生の所まで来てほしい。

そして、その時はお互いに笑顔で握手をしよう。

その日が来るのを、楽しみに待っているよ。

ある日の休み時間、その子が笑顔で私の所にやってきました。

そして、「先生！」と言って手を差し出してきました。

私は笑顔で「そうか！」「おめでとう！」と言って力強く彼の手を握りました。

彼は、暴力を振るうことをやめました。

それどころか、下級生たちのケンカを諫め、先輩らしく解決するまでになりました。その時の学級通信を抜粋で紹介します。

(2019/11/6/発行 6年3組学級通信『花は咲く』第628号より)

6-3には「正義感の強い子」がいます。

これは一つの特徴だし、強みだし、持ち味です。

「正義感を強くしなさい」と言われても、人はそうはなりません。

つまり、備わっている持ち味であり、カラーだということです。

もちろんこの持ち味がある子は、クラスに一人ではなく数人いますが、その程度にも質にもやはり違いがあります。

例えばその内の一人を、仮にBくんとしましょう。

自分の正義感の強さを、どうやらBくん自身は分かっていない様子でした。

しかし、ふとした出来事でこの強さと質の高さが明らかになります。

それは、6月の出来事でした。

下級生の子が帰り道にケンカをしていたそうです。

しかも、ただのケンカではありません。

一人対三人のケンカです。

結果、一人の子は仲間外れにされて、泣きながら帰ることになりました。

その様子を遠目に見ていたBくん。

全員を呼んで、話を聞きました。

事情を聴いて、一人で泣いている子が悪口を言ったのが原因ということが分かりました。

その言い争いから、仲間はずれが起きたようです。

Bくんは3人に言いました。

「〇〇は家が遠いから一人だと寂しいから一緒に帰ってあげな。」

そして、一人で泣いていた子には

「そんな風に悪口を言うのは良くないから、その事は謝ろう」

そう言って、仲直りをさせてあげたそうです。

翌日。下級生の担任の先生がわざわざ感謝を伝えに6-3の教室に来られました。

周りの友だちは、驚きました。

「私なら、見過ごしてたと思います。」

「僕は、B くんのことを誤解していました。」

「6 年生にふさわしい行動だと思います。」

「すごくカッコイイです。」

作文に、こうした内容を全員が書いていました。

その子は、周りの友だちにそうやって言われて、「正義感の強い」自分に気づいたようです。そして、その持ち味を前向きに使う様になりました。

ルールを守ろうと声を上げたり、クラブ活動で勝敗にこだわる下級生を諷めたり、正義感の強さを生かすことを体得していったのです。

この B くんは、その後も素晴らしい行動を積み重ねていきました。

生活だけでなく勉強にもその好影響は及びました。

=====引用ここまで=====

これは6年生の例ですが、一つの行動が徐々に改善されながら、根本的な解決に至るまでに相応の時間がかかることがお分かり頂けるかと思います。

多くの大人は、「一度」で「激変」を望んでしまうために「叱る」などの極端な対応を重ねてしまうのですが、長い目で見れば根本的で自主的な改善に至る道こそが真なる成長につながっていくことは間違いありません。

SOLAN の1年生の間でも、こうした真なる成長への道を歩み始めた子たちが大勢います。特に、「暴力・暴言」に関しては、確かな変化の手ごたえが感じられてきました。

今朝、私はある子にインタビューをしました。

以前はイラっとした時に毎回手が出てしまっていて、何度も友達とトラブルになっていた子です。

その子は最近、手を出すことをやめました。ですので、どうやってそのようなことができるようになったのか、インタビューしてみたのです。

その子は、次のように答えてくれました。

「うーんと、友達が嫌だったんだってことが分かってきたと思う。」

（前は分からなかったの？）

「うん、あんまり分からなかった。」

（どうして、その気持ちが分かるようになったんだろう？）

「いろいろ先生とかにも話してもらって、友達の悲しそうな顔とかも見てなんか分かるようになった。」

(幼稚園の時にもきっと同じようなことがあったんじゃない？その時はどうして分からなかったの？)

「えーと、学校に来てなんか前よりちょっと大人になって、そうやって暴力をすることが恥ずかしいって思うようになってきた。」

この「恥ずかしい」という言葉が出てきたことに、私はとても驚きました。確かな成長への歩みを続けているその子の姿に、爽やかな感動をもらった本日の朝でした。(渡辺道治)

(多数の投稿をいただき、感激しております。きっと頭の中でいろいろと考えながら締め切りが来てしまった方もあるかと思いましたので、今週いっぱいまで投稿を受け付けたいと思います。気軽に楽しくご参加いただければ幸いです。)

① 小学生時代のおススメ本…「読書は、宝の山への旅」そんな言葉があります。新しい考え方に出会い、新しい言葉を知り、時には冒険し、時には迷い、そして時に感涙する。価値ある本との出会いは、人生を豊かにしてくれます。そこで、みなさんが小学生時代に読んだおススメの本を教えてください。「お父さんやお母さんが子供のころに読んだおススメの本」という言葉の響きは、子どもたちの読書熱をさらに高めてくれることと思います。

② 小さい頃の夏休みの思い出…先日、あるクラスの学活で「夏休みの思い出を守れゲーム」というレクを行ったそうです。自分の夏休みの思い出を5枚の短冊に書き、先生がそれを当てに行くというゲームなのですが、その中で外国人の先生が「スイカ割りをした人？」を尋ねると、なんと1人も手が上がらなかったそうです。夏休みの代名詞のようなスイカ割り文化も、現代では少しずつ変わってきているのかもしれませんが。そこで、お家の方々の子どもの頃の思い出をいろんな角度から教えていただければと思います。古き良き時代の文化に子どもたちが興味を持つきっかけにもなりそうです。

↓↓↓ご参加、お待ちしております↓↓↓

[1 学年通信「コスモスハーモニー」読者ページ \(google.com\)](https://www.google.com)